

チェルシーを買った男

盛田 常夫

プレミア・リーグの名門クラブ、チェルシーがロシアの富豪に買収された。その富豪とは、ロシア第二位の長者ロマン・アブラモヴィッツ 36 歳。2003 年度 *Forbes* 世界億万長者番付 49 位に位置する資産総額 57 億ドルの金持ちである。とうとうロシア・マネーが世界のサッカー界に流れる時代になった。

しかし、ちょっと待って欲しい。ロシアはほんの 10 年ほど前まで社会主義だったのではないか。15 年前には無一文の青年がこんな短期間にどうして巨額の富を築くことができたのだろうか。ビル・ゲーツのように、よほど大きな発見・発明で、世界商品を開発したのだろうか。今年の億万長者番付 500 位には、ロシア人が 17 名も名を連ねている。ロシアの資本主義が本格的に稼働した証拠だろうか。

そうではない。億万長者番付に名前を連ねるロシア人は、皆、石油、天然ガス、金属の巨大企業の株主だ。それらの企業はすべて、「民営化」された旧国営企業。しかし、どうやって株主になれたのか。元手の資金を持っていたはずがない。「無から有」を生み出す錬金術があったのだ。ロシアにおける「民営化」は、多数の命の犠牲と、権力を使った術数、それを利用した知恵者の才覚で実行された。その錬金術の結果が億万長者の登場なのだ。

Yukos への捜査

7 月 19 日付け *Financial Times* 第一面の 3 分の 2 は、ブレア政権を揺るがすケリー博士の死亡記事で占められた。ところが、紙面の右欄の 3 分の 1 には、“Yukos probe extends to five murder cases” (Yukos への捜査が 5 件の殺人事件に及ぶ) という記事が並べられている。何故、この事件が一面記事になるほど重要なのか。

Yukos は Gazprom、UES や Lukoil に次ぐロシア最大級の石油・天然ガスのエネルギー関連企業。その Yukos が同じく石油企業の Sibneft を併合して、世界メジャーに匹敵する企業になる計画が進行中である。その事実上の所有者が殺人容疑で捜査を受けているのだ。

すでに逮捕されたプラトン・レヴェジェフは、2003 年の *Forbes* 億万長者番付 427 位に顔を出した富豪である。彼の資産は Yukos の持ち株。レヴェジェフは本命でない。最終的な標的は Yukos の CEO、泣く子も黙るロシア人の億万長者ホドルコフスキーだ。2003 年億万長者番付世界 26 位、公表資産 80 億ドルの富豪である。モスクワのホドルコフスキーの邸宅は、「ホドルコフスキー宮殿」と通称されている。記事によれば、ホドルコフスキーと盟友ネヴズィリンも、検察の聴取を受けた。容疑は 1998 年 6 月に起こった Yukos の生産基地ネフチェユガスンク市の市長暗殺。Yukos の不正と闘っていた人物として知られている。

Sibneft 創生の秘密

何を隠そう、Yukos の併合対象になっている Sibneftこそ、アブラモヴィッツの主要な資産を構成する。旧ソ連では、Gazprom に次ぐ第二の巨大企業として、石油発掘・精製会社 Rosneft 社があった。Rosneft 社保有の最良の資産である二つの事業所（石油生産のナヤバルスクニェフトガスと石油精製のオムスク精油所）を切り離して、新会社 Sibneft を創設することを提案したのが、若くして石油ブローカーになったアブラモヴィッツである（Paul Klebnikov, *Godfather of the Kremlin*, Harcourt, 2000）。当時、クレムリンへの接近を図り、後にエリツィン大統領を手玉にとったベレゾフスキーに、この話が持ち込まれた。1995 年初頭のことである。この戦略にホドルコフスキーとポターニンが加わった。ベレゾフスキーがエリツィンを説得し、チュバイスとチェルノムイルジンが会議を取り仕切り、1995 年 3 月の閣僚会議決定にこぎつけた。ホドルコフスキーとポターニンはこの会議に出席し、「民営化」の全体スキームを説明した。

ここから、猛烈なスピードで、エネルギー関連の巨大国営企業を「民営化」する策略が練られた。これが 1995 年暮れに行われた「負債と株式の交換スキーム」による巨大企業の実事上の売却に結実した。キャッシュ・フローに問題を抱えていたこれらの企業に融資し、その見返りに株式を取得する。スワップを装ったダンピング買い取り戦術だった。

1995 年 12 月に公示された入札で、Lukoil, Yukos, Sibneft, Surgut, Sidanco, Norilsk などの負債オークションがおこなわれ、ベレゾフスキー・グループは他の産業・金融グループを巧妙に排除して、すべての入札を落札した。落札価格は市場価額のほぼ 20 分の 1。ベレゾフスキー・グループが握る銀行や投資会社が落札した。後は事実上の山分け。「民間」会社に移った持ち分を個人資産に転化するのに、何の策略も要らない。

こうして、ベレゾフスキー・グループ全員が、突如、2001 年の Forbes 億万長者に顔を出すことになった。もっとも、ベレゾフスキーは資産を隠しているので番付には出ていない。チェルノムイルジンは、後を継がせたビヤヒレフとともに、管轄企業 Gazprom の「民営化」で株を「取得」して億万長者になったが、奇妙なことに、2002 年の番付から姿を消した。

捜査はどこまで及ぶか

このような巨額の富の配分を、他のグループがただ指をくわえて見ていたはずがない。だからこそ、ロシアでは 1990 年代を通して、抗争による殺人事件が年間 1 千件以上も発生し、明白な囑託殺人が年間 100 件以上起きるといふ異常事態が続いている。ほとんどの殺人事件で、実行者や黒幕は逮捕されていない。ソ連崩壊後のロシアは無法地帯と化した。無能なエリツィンに代わって KGB プーチンの登場が必要になった社会背景である。

Yukos の捜査は Sibneft にも向かっている。Rosneft の分割に強硬に反対したオムスク精油所長リツコヴィッチは、1995 年 8 月に溺死体で発見された。プーチンがその気になれば、逮捕・拘束の理由に事欠かない。チェチェン・マフィアをバックにモスクワ・マフィア戦争を勝ち抜き、1995 年春のリスチェフ（トーク・ショウの人気ホストで ORT テレビ社長）暗殺事件の首謀者とされながら捜査を逃れ、逆にエリツィンに取り入ったベレゾフスキー。

その彼と行動をともしたアブラモヴィッツが安泰であるわけがない。モスクワ市長は「ロシアのサッカー界に唾する行為」とチェルシー買収を批判し、体制崩壊の貧困に喘ぐ国民も国家資産をかすめたお金がホビーに使われることに批判的なのは当然だろう。いかに資金不足とはいえ、出所の怪しいお金の飛びつくサッカー・クラブは、もはや名門でも何でもない。マネー・ロンダリングの道具になったと言われても仕方がない。チェルシー売却は、「ケリー博士」事件に次いで、今夏イギリスの第二のスキャンダルだ。諸悪の根元とも言えるベレゾフスキーも、イギリスに逃亡中だ。

それにしても、ブーチン大統領は民営化犯罪をどこまで追求するつもりだろうか。国会選挙と大統領選を控え、各種の勢力の駆け引きが続いている。

アメリカは例のごとく、一連の逮捕について、投資資産を脅かす政治介入と懸念を表明している。マフィアが背広を着て、サッカー・チームを持てば免罪されるのか。この種の資金洗浄も「グローバリゼーション」で放免されるのか。もっとも、身近な事例がある。イタリア首相も AC ミランの持ち主だ。

(2003年8月)